

フローベール『立候補』(La Candidature)

— 二つの戯曲筋書をめぐって —

滝澤 壽

現代小説の祖の一人として今やその名声をほしいままにするかのフローベールが、少年時代より演劇に並々ならぬ情熱を寄せていたことは、研究家には周知の事実であろう。そしてまた、この情熱の集大成が1873年秋に執筆され、遂に生涯唯一の上演戯曲となった政治「喜劇」『立候補者』(Le Candidat)であり、しかも翌74年3月11日パリのヴォードヴィル座で幕を開けた公演が、晩年近くに到ってようやくその悲願を達した作者の自信と期待を裏切つてわずか四日間で打ち切りに終わった事実も、あるいは同然であろう。この間の事情については、拙著『フランス文学覚書』(駿河台出版社、1989)所収の論考「劇作家フローベール」で、屋上屋を架すを承知しつつ、いささか詳しく考察したことがある。

ところで、現下における『立候補者』の最良のエディションは、1988年に刊行されたルーアン大学イヴァン・ルクレール教授校訂によるル・カストール・アストラル(Le Castor Astral)版である。筆者はこの版に基づき未訳の戯曲の翻訳を試み、その一部は文芸誌「クインテット」第十二号(「クインテット」刊行会、1992)に掲載した。しかしこうした試訳を通して痛感させられたことは、本作品の生成過程を原草稿に直に当たって検討してみる作業の不可欠性であった。折も折、文部省在外研究員としてフランス留学の僥倖に恵まれたのを機に、この戯曲の生成論研究に専念するを得た。小論はその成果の一端である。

フローベールには、『立候補者』に先行し題名も酷似した『立候補』(La Candidature)なる、しかもこの題からも推測されるように同じく選挙をテーマとした政治劇の筋書(scénario)が存在するらしいことは、以前からおぼろげに知られてはいた。しかし、例えば代表的なフローベール全集の一つであるクラブ・ドゥ・ロネットム(Club de l'Honnête Homme)版第七巻(1972)の編者の注が端的に示しているように、「余りに錯綜した期待はずれなものなので公刊を断念」して来たのであった。ところが前記ルクレール教授は前述の校訂・編纂の過程で改めてこのテキストを発掘し、その重要性を校訂本の序「フローベールと“演劇スタイル”」の中で、またとりわけノルマンディー出身の師弟作家フローベールとモーパッサンを対象とする学術誌「ノルマンディー研究」(Etudes Normandes)第三号(1988)に、テキストの転写を添えた論文「フローベール『立候補』、ある戯曲の未刊の筋書」(FLAUBERT: LA CANDIDATURE SCENARIO INEDIT D'UNE PIECE DE THEATRE)を発表して、明らかにしたのである。以下の論は、従って、これらの論考に依拠しつつ、滞仏中に指導を仰いだパリ第八大学フランス文学科主任教授、フランス国立科学研究所附属近・現代テキスト草稿研究センター・フローベール研究チーム責任者ジャック・ネーフ博士の教示、ならびに同センターのオディーユ・ドゥ・ギディス女史の好意により、同センターがコピーの形で所蔵する原テキストを閲読して得た分析結果を加味したものである。

始めに、これら二つの戯曲筋書オリジナルの所在を明らかにしておこう。第一のテキストはフローベールの故郷ルーアンのルーアン市立図書館所蔵『『ブヴァールとペキュシェ』関係書類』(Dossier *Bouvard et Pécuchet*) 最終第八巻整理番号 Ms g 226 8 の巻末近くに収められ、196および197丁表裏計四頁である。この「関係書類」は『ブヴァールとペキュシェ』、とりわけ未執筆に終わった第二巻の素材と推定される文献、あるいはより広くその突然の死に際して残された雑多な資料を集めたもので、芸術創造の舞台裏を垣間見せるいわば作家の創作ノート・ファイルとでも言えようか。問題の八巻には長短およそ二十編の戯曲筋書が見出され、本テキストもその一つである。第二のテキストはパリのフランス国立図書館にあり、筆者も指導を受けたパリ第八大学助教授アンス・エルシュベール・ピエロ女史の努力になる『十九-二十世紀フランス文学草稿目録』(*Répertoire des manuscrits littéraires français XIX^e-XX^e siècles*)にも『演劇 選挙風俗喜劇のプラン 立候補』(Théâtre Plan d'une comédie de mœurs électorales *La Candidature*)として記載されている。またテキスト見返しには、「5262 Manuscrit inédit N.a.f.-14156 Le Candidat F. III. 7.3ff. Acq. 21092」と記されており、計表裏三葉五頁である。この第一、第二のテキストの関係についていえば、後者は最初の二幕を発展させたものであることから、恐らく前者の後で書かれた補完的な筋書と考えられよう。

次に『立候補』および『立候補者』の梗概をかいつまんで述べておく。なお前者は筋書であるが故に、幕・場の区切りも確定されておらず、また細部に不明の部分もあるが、大筋を捉えるべく努めた。

『立候補』梗概

主人公ドゥ・サンタルノーが村長選に出馬する。対立候補はドゥ・レカイユ。知事が介入に乗り出し、前者を支援。代表団が結成され、知事に面会。知事の支持を決定的にするため、ドゥ・サンタルノーは妻を使って色仕掛けを画策する。彼女は始めこの企みに反発するが、結局夫の目論みの域を超えて、知事の子息ヴィクトールと本当の恋に落ちてしまう。ドゥ・サンタルノーは当選は果たしたものの、自業自得でコキュとなる。

『立候補者』梗概

主人公で元銀行家のルスランが代議士選挙に出馬する。対立候補はブーヴィニー伯爵とグリュシェ。貧乏貴族には嫁資を餌に、その子息と自分の一人娘の結婚を恋人との仲を割いて取り決め、一方グリュシェには借金棒引きを条件に、いずれも裏取引の末立候補を取り下げさせてしまう。またジャーナリズムを取り込むため、詩人・新聞記者ジュリアンが妻に寄せる思いを逆に利用しようと、これを黙認する。ルスランは当選は果たしたものの、娘も金もすべて失い、かつ自業自得でコキュとなる。

以上のような二作品の関係の検討に入る前に、予め確認しておかねばならぬことは、梗概でも察しられるごとく、『立候補』なる戯曲筋書はその題名の大きい類似にもかかわらず、上演戯曲『立候補者』と直接繋がる筋書でもなければ、前記編者の言のごときいわゆるその「準備覚書」でもないということである。また、着想を恐らくは走り書きした筋書と完成戯曲を論ずるのは、次元の乖離が余りに甚だしすぎるかもしれない。しかしそれは留保した上で、なおその関係は我々の関心を引くに十分だろう。先ず、二作を比較考察してみると、相違点ならびに相似点はおよそ次のようにまとめられよう。

主な相違点

- 1) 登場人物が全面的に異なること。特に、選挙に出馬する主人公が貴族から成金ブルジョワに変わり、また当然、筋にもそれなりの変更、複雑化が図られていること。
- 2) 扱われている選挙が、村長選から代議士選挙へと規模が拡大し、それかあらぬか知事の権力介入の度合いが減じ、有権者の比重が相対的に増していること。
- 3) 劇全体の調子、受ける印象に微妙な差異が感じられること。即ち、「喜劇」と銘打たれた『立候補者』が「一大政治風刺喜劇」であることに異議はあるまいが、他方『立候補』には、無論推測の域を出ないけれども、「政治・選挙風俗研究」にむしろ力点をおき、悲劇と喜劇の狭間を狙った、これら二ジャンルの中間形態であるいわゆる正劇ジャンル (genre sérieux) への指向が窺われること。

主な相似点

- 1) 主題がいずれも政治、とりわけ「民主政治」最大のイベントたる選挙とこれをめぐって繰り広げられる欲、色、金の人間模様であること。
- 2) 幕切れにおいて、紆余曲折の末主人公がものにする当選の榮譽、そのための一つの手段として妻の色香を利用した付けがまわり、遂に妻をものにされコキュに成り下がる不名誉、かくした劇の基本構造の暗合が明確に認められること。

以上こうした相違、相似の諸点の中で、我々の注意を最も引くのは、何といたっても最後に挙げた「劇の基本構造の暗合」であり、この一事だけでも二つの劇の深い関わりを示唆するに足る有力な証左であると思われる。事実、作者フローベールは筋書『立候補』中に、簡潔極まりない形で自作を規定、表象するキー・ワードと見做し得る一句を書きつけているのだ。いわく、「選ばれた一やられた」(Elu-foutu)。そして重要なこと、それはこの両義性の構図が『立候補者』の終幕まで一貫して保たれ続けているということである。即ち、先ず前者にあっては次のごとく具体化されている。

「サン・タルノーのせいでドゥ・サン・タルノー夫人とヴィクトール、これが作品の創意だ。それがサン・タルノーの立候補から宿命的に生じて来るようにすること。彼に成功を保証する一つひとつの事がコキュたることを募らせる。かくして彼が指名されるまさにその間に、事は成し遂げられるのだ。」

地方政界に君臨し、村長選挙に絶大な影響力を持つ知事の後盾を得ようとする工作が、その代償として妻と知事の子息ヴィクトールの不倫を甘受せねばならぬ事態を招来するという図式は、『立候補者』では主人公ルスランがジャーナリズム抱き込みのために、詩人・新聞記者のジュリアン青年の妻への恋慕に目をつぶるという形に変えられただけで生き続ける。しかも幕切れのルスランの問い「そうなったの?」と仮に訳した《Je le suis?》なる原台詞、その中性代名詞が前記《Elu-foutu》の表面上は前者を明示しながら、同時に後者をも暗示することを考えると、たとえこうした形式と修辞はフローベールの十八番であり、彼一流のないしは常套的な嘲弄の発現であるとしても、やはりこの二作は題名の近似以上の類縁関係で結ばれているように思われるのである。

残された大きな問題は二つの筋書の執筆時期、ならびにそれらの背景となっている時代の確定であるが、草稿解析に未熟な筆者には無論、専門家にとっても手掛かりとなる直接間接の資料が限られているだけに極めて困難であり、諸家により見方が分かれる。従って二人の

大家に代表される見解を挙げるに止め、今後の研究に俟ちたい。先ず執筆時期については、1873年秋の『立候補者』に先行することは明らかであるが、上記ルクレール教授は70年代説、そしてフローベール研究の碩学リヨン大学教授ジャン・ブリュノー博士は筆跡等から70年以前と推定している。次に時代背景に関しては、政治・選挙制度を始めとする習俗から推測し、前者は同僚で歴史学の M. J.-P. シャリーヌ教授の言として40年代、即ち『ボヴァリー夫人』とほぼ同時代との説を紹介しているが、一方後者は50-60年代であろうとしている。

いずれにしても、今までほとんど等閑に付されて来た二つの戯曲筋書とその重要性の再発見は、『立候補者』の生成過程の解明のみならず、フローベールの劇作活動、ひいてはその文学営為全体を考える上で、少なからぬ意義を持つことは確かであろう。

Sommaire

Flaubert : *La Candidature*

— A propos des deux scénarios —

Hisashi TAKIZAWA

Nous connaissons les deux scénarios d' une même pièce de théâtre dont on n'a guère tenu compte : *La Candidature*. L'un se trouve dans le Dossier *Boward et Pécuchet* coté Ms g 226 8 aux folios 196 à 197 de la Bibliothèque Municipale de Rouen et l'autre, composé de trois feuillets, complémentaire de celui de Rouen et probablement postérieur, à la Bibliothèque Nationale à Paris.

Or, saisissant une occasion inespérée de faire mes études en France comme chercheur à l'étranger, j'en ai profité pour analyser ces manuscrits en les comparant avec *Le Candidat* (1874), seule pièce représentée de ce maître, sous la direction de Docteur Jacques Neefs, Professeur à l'Université Paris VIII, Responsable du Programme Flaubert de l'Institut des Textes et Manuscrits Modernes du C. N. R. S.

Malgré un titre similaire, en réalité *La Candidature* n'est pas considérée comme directement préparatoire au *Candidat* ; les personnages sont différents, l'intrigue et le ton aussi. Mais on peut constater que ces pièces politiques à thème électoral ont toutes les deux pour structure fondamentale cette coïncidence finale entre élection et cocuage («élu-foutu»), note laconiquement l'écrivain lui-même).

Nous pourrions donc en conclure que l'on voit une tentative parallèle de ces deux œuvres théâtrales, ce qui nous permettra d'élucider un aspect de la genèse du *Candidat*.

附 ルーアン市立図書館蔵『立候補』筋書(原草稿 縦32.4cm横20cm)

B et P
Ms g 226 8

198

Le préfet.
M. de Saint-Arnaud

Saint-Arnaud
M. de Saint-Arnaud

Le des Caye / qui écrit

Mme de Saint-Arnaud / M. de Saint-Arnaud
M. de Saint-Arnaud / M. de Saint-Arnaud
M. de Saint-Arnaud / M. de Saint-Arnaud

Les gros / M. de Saint-Arnaud
M. de Saint-Arnaud / M. de Saint-Arnaud
de la maison / M. de Saint-Arnaud
electeurs

Membres du conseil general.
un garçon de bureau

M. de Saint-Arnaud fait venir le commis
du village de Saint-Arnaud pendant
qu'il est là

au village de -

1 election - M. de Saint-Arnaud - M. de Saint-Arnaud

M. de Saint-Arnaud - M. de Saint-Arnaud

M. de Saint-Arnaud - M. de Saint-Arnaud

M. de Saint-Arnaud - M. de Saint-Arnaud

M. de Saint-Arnaud - M. de Saint-Arnaud

M. de Saint-Arnaud -

I.

2 fin d'une séance du conseil general
M. de Saint-Arnaud se retire, les conseillers restent en place

11. un garçon de bureau apporte les lettres

de M. de Saint-Arnaud - 11. les lettres

une lettre en anglais - 11. on rappelle le

garçon de bureau - 11. on rappelle le

chercheur en vain M. de Saint-Arnaud

de Saint-Arnaud, il écrit les conseillers, ... c'est

un rapport au conseil, etc, formation

de la députatation.

III. M. de Saint-Arnaud
Le cabinet du préfet - M. de Saint-Arnaud

11. la députatation arrive, M. de Saint-Arnaud se retire

M. de Saint-Arnaud se retire son fils - 11. le préfet

et la députatation, le préfet Calum. je

vais venir en faire pour vous même -

indication de la députatation - 11. le préfet

recommande le préfet. Monologue. 11. le préfet

rappelle M. de Saint-Arnaud, le préfet, M. de Saint-Arnaud

à M. de Saint-Arnaud. 11. le préfet à son fils, indication

politique. 2 personnes. - indiquent à

après l'indication de M. de Saint-Arnaud

B et P
Ms g 226 8

217

197

Un marin de son mari, je qu'il paraître son au 1^{er}
acte tout les n'y paraissent pas. on savait les
deux entogues en bords allant venant

V. I Victor & M^r de St Bernard et les professeurs Arnould
② -
Arnould y avait une promesse outre de Victor.
M^r Arnould en lettre au M^r de St Bernard
Jeunesse Mononyme, double état - V. raitre Mononyme
U est etc ---

- I la table se lev. sur la sortie de l'homme
Mononyme par M^r Arnould & M^r de St Bernard
M^r de St Bernard au Victor, M^r Arnould
II M^r de St Bernard
III M^r de Victor
IV M^r Arnould sur M^r de Victor on vient demander
Victor M^r une lettre
V un document qui remet la lettre à M^r Arnould
VI la lettre de la lettre, on est en train d'être - mononyme
double état de l'âme de M^r Arnould
VII entre Mononyme il est etc etc.

Commençat au 3^e acte —

Bien sûr les partisans d'Alfred
de l'écage à celui de Mr M. A. et de L. — Alfred

Mr M. A. et Y par la faute de M. A. voilà
l'idée de l'écage — Alfred ressortir fatatement de
la candidature de M. A. — chaque chose qui lui arrive
du succès augmente son écage — c'est la chose
le contemplant pendant même qu'on la nomme.



Un écage qui doit paraître à l'acte des
électeurs faisant absolument le que l'écage est à
M. A. de faire — dit être que comme antagoniste
de Alfred du gouvernement dès le début. Ainsi
l'exposition serait complète dès le 1^{er} acte.

I. chez le prof. Alfred

II

III M. A. les électeurs

III Y est - foule



Une scène entre M. A.
et la femme Alfred
qui tient sonner à M. A.
est indifférent.

Au dernier acte la scène de la scène
deux ses personnages, sera bien par la présence
des arguments de M. A. des corruptions de M. A.
et de la femme de M. A.

M. M. A. femme, prêtre, rattachés tout à fait comme
il faut avec que M. A. mais pour sans un moment
de chair. Naïveté de M. A. au lieu de la scène intéressante
des par en avoir.